

[平成19年度普及に移す技術]

[技術名] 福井県におけるダイズべと病粒の発生状況と防除対策

[要約] ベと病によってダイズ子実が汚染され、小粒となる被害粒が1.1～6.0%発生している。アゾキシストロピン剤の開花20～30日後の散布はべと病粒の発生を抑制する。

[キーワード] ダイズ、べと病、子実被害、防除薬剤、

[担当] 農業試験場・生産環境部・病理昆虫研究グループ

[連絡先] 電話 0776-54-5100、電子メール n-honda-s4@pref.fukui.lg.jp

[背景・ねらい]

本県においてダイズべと病は7月下旬に葉に発生し始め、その後圃場全体に広がる。本病は収量に影響しないとされていることから、防除対策は行われていない。しかし、近年、べと病による汚染粒(図1)の発生が見られるようになってきた。

そこで、本県における発生および被害状況を調査し、既存薬剤による汚染粒発生抑制効果を明らかにし、薬剤選択の基礎資料にする。

[技術の内容・特徴]

1. ベと病によって子実が侵されると卵胞子が表皮に付着し汚染粒となる(図1)。
2. 坂井地区におけるべと病発生粒率は1.1～6.0%と紫斑粒より多く(図2)、圃場によっては発生粒率14.6%と中発生の圃場もある。
3. ベと病粒は健全粒に比べ粒厚が小さく、ほとんどが小粒となる(図3)。
4. ベと病粒の防除適期は開花20日～30日後である(図4)。
5. アゾキシストロピン水和剤の1回散布でべと病粒、紫斑病粒の発生を抑制することができる(図4)。

[技術の活用面・留意点]

1. ベと病汚染種子を播種すると、そこから圃場全体に伝染するので、健全種子を使用する。
2. 外見健全種子でも卵胞子を形成していることがあるので、採種圃場ではべと病早期発病株の抜取りと薬剤散布の併用によって健全種子生産に努める。

[普及計画]

普及目標: ベと病による被害粒率 1%以下

普及対象: 大豆生産農家、特に大豆採種農家

普及に向けた対応: 健全種子利用によるべと病粒発病抑制効果の実証

[具体的データ]



図1 ダイズべと病による子実上の卵胞子(右)と汚染粒(左)

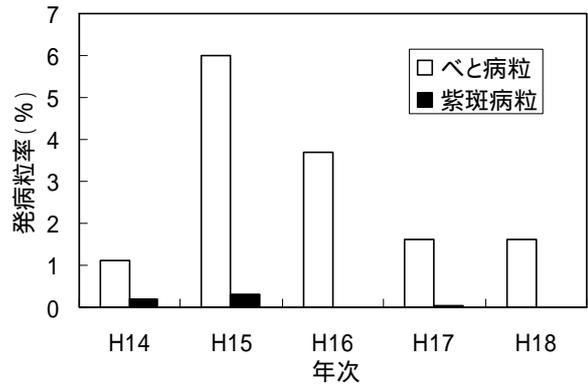


図2 坂井地区におけるダイズべと病粒の発生状況
注)4~7地点の平均

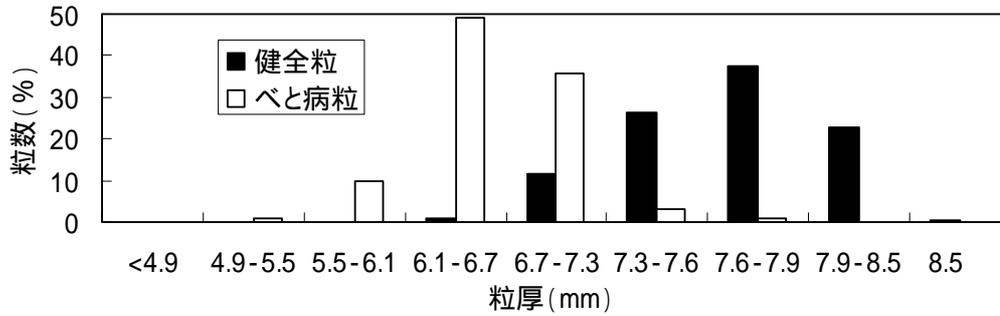


図3 ダイズべと病粒の粒厚分布

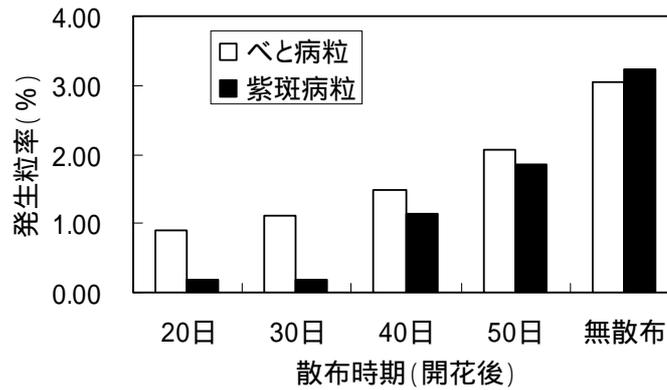


図4 アゾキシストロビン水和剤の散布時期とダイズべと病粒発生抑制効果

[その他]

研究課題名：農薬抵抗性検定事業

研究期間：1980年度～

研究担当者：本多範行